

哀歌 第3章 22～23節a

「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。」

雨上がりの通りを散歩する。駅近くの芝生地帯は水分を含んで柔らかになっている。上を歩くと普段よりさらに程よいクッションの感じだ。地面も水分で潤って土の色が鮮やかに見える。気の遠くなる時を経て、絶えることなく今も季節の恵みの雨が大地を生き返らせている。

恵みは丁度雨のように、一方的に注ぐものである。主からの一方的恵みの注ぎは私たちが滅ばないことでわかる。主の恵みにより今生かされている者が歌う。尽きることのないあわれみは歌う者の今日を生かす。丁度芝生が季節の雨で柔らかくよみがえったように。地面が土の色、鮮やかになったように、歌う者のいのちを再生させ歌となる。注がれる恵みの尽きないことを確信して、さらに歌は続く。

そして、歌う者が体験するのは、主の恵みが朝ごとに注がれること、それも新しいと歌う。朝ごとに受ける恵みが繰り返され、それに慣れることはない。受け手の予定値にとどまることはない。朝ごとに新しい。朝ごとに新しい日が開く。主の恵みは、尽きず、朝ごとに新しい。